

八巻本『発心集』後二巻後人模作説

——巻第四末の思想などに着目して——

森 新之介

問題の所在

『発心集』は、蓮胤鴨長明（久寿二年〔1155〕か・建保四年〔1216〕）が晩年に編纂した仏教説話集である。伝本には版本八巻と写本五巻があり、前者の慶安四年版は今日伝存の諸本で最も原形に近いと見てよい。⁽¹⁾しかし、幾つかの箇所は後人の増補でないかと夙に疑われており、築瀬一雄は前六巻の偶数巻末と後二巻の全体が後人増補だとする説を唱えた。⁽²⁾

築瀬説は一定の支持を得たが、後に異論も生じた。そのため今日では、巻第二、第四の末尾は後人増補だろうが巻第六の末尾は蓮胤真作だという見解が主流になり、存疑箇所で分量が最も大きい後二巻の真偽については説が分かっている。『発心集』における後人増補の箇所や過程が未だ明らかでないということは、同書の研究だけでなく、蓮胤の研究にとっても重大な問題である。前六巻の偶数巻末や後二巻の全体について、改めて真偽を検証すべきだと考えられる。

筆者は旧稿で、巻第二末と巻第六末が専修念仏者による裏書の摺入したものであることを論証した。⁽³⁾そのため本稿では、残る巻第四末と後二巻について検討する。

巻第四末は、前述の如く蓮胤の真作でないということがほぼ確定しているためであろうか、十分に注目されていない。⁽⁴⁾しかし本稿の結論を一部先取りして言えば、巻第四末が後人増補らしいからこそ、これに着目することで後二巻もまた後人増補であることを論証できると考えられる。

まず第一項では議論の前提として後二巻の先行研究について、第二項では本稿で着目する巻第四末についてそれぞれ整理する。そして第三乃至第五項では、偶数巻末以外の前六巻と巻第四末、後二巻という三者の発心論を比較する。以上の作業によって、後二巻は後人が当時の前六巻を模作したものであることを論証したい。

第一項 議論の前提

八巻本の後二巻が増補であることは、五巻本など複数の文献が前六巻と重複するものの後二巻と重複しないため、疑いない。問題は、後二巻を増補した者が蓮胤か後人かということである。

後二巻に後人増補の箇所があると論証した先行研究は、少なくとも四つある。第一に、巻第八第十四話「下山僧於三川合社前絶人事」では神が、『般若心経』は「実ノ法」なので「真経」でもあり、「イハレ深コトハリ」なので「深経」でもあり、「神明ノコトニメデ給経」なので「神経」でもあると夢告している（二六〇ウ）。これについて小林芳規は、「真経」も「深経」も「神経」もいずれも成り立つという背景には、「真」「深」「神」の三字とも同音であるという認識がある」に違いないものの、鎌倉前期まで「心」「深」のんは唇内発音の m・ムで「真」「神」のそれは舌内発音の n・ンだという使い分けがあったため、説話の成立時期は「m と n とが音韻上、一つになった時代、つまり鎌倉後期、溯っても鎌倉中期以降でなければならない」と指摘している。⁽⁵⁾

Abstract

第二に、巻第八第十一話「聖梵永朝離^レ山住^{南都事}」にある「彼アハウノ^{阿呆}」

(三オ)という罵言について、松本修は「アハウ」は、16世紀も半ばになつて、ようやく京都で定着した言葉であつたはずだ、「13世紀初頭に没した鴨長明自身の書いたものでは決してあり得ないのである」と述べている。⁽⁶⁾

第三に、巻第八第十四話の跋と通称される長文評語に「吾国ハ昔イザナミイザナキノ尊ヨリ百王ノ今ニイタルマデ」(二八オ)とある。よく知られているように、蓮胤没年の前後は皇統が百代で絶えるという百王思想が流行していた。そのため、同時代の『新古今和歌集』真名序(藤原親経草、元久二年「1205」三月付)の「撰^ス斯^一集、永欲^レ伝^ス百王^一」でも慈円『愚管抄』巻第七の「百王ヲカソフルニイマ十六代ハノコレリ」(三四二頁)でも、百王は現在でなく未来のこととされている。小島孝之は、蓮胤の最晩年が第八十四順徳帝の御宇であつたため、「百代まで残すところ十六代、(…)もしそれほど隔たりが念頭にあつたら、果たして「今」と表現するであらうか」と述べ、この成立時期は九十代以上となつた鎌倉後期以降でないかと疑う。⁽⁷⁾

そして第四に、巻第八第十四話の長文評語では、日本について「久ク神ノ御国トシテ、其加護ナアラタナリ。(…)イキホヒ事ノ外ナル国々サヘ随ツ、五濁乱慢ノイヤシキモ、猶大乘サカリニヒロマリ給ヘリ」(二八オウ)と述べている。新間水緒は、このような自国優越の神国思想は蒙古襲来以後にはじめて出現するものであり、「おそらく元寇の後神国思想が高揚した時期に付加されたものである」と⁽⁸⁾と推定している。

これら四つの先行研究は、後二巻に蒙古襲来以後または戦国時代の増補があることを論証したものである。しかし分析対象が巻第八の後方に偏っているため、これだけでは後二巻の全体が後人増補だとも、巻第八の後方だけが後人増補だとも解釈できてしまう。⁽⁹⁾

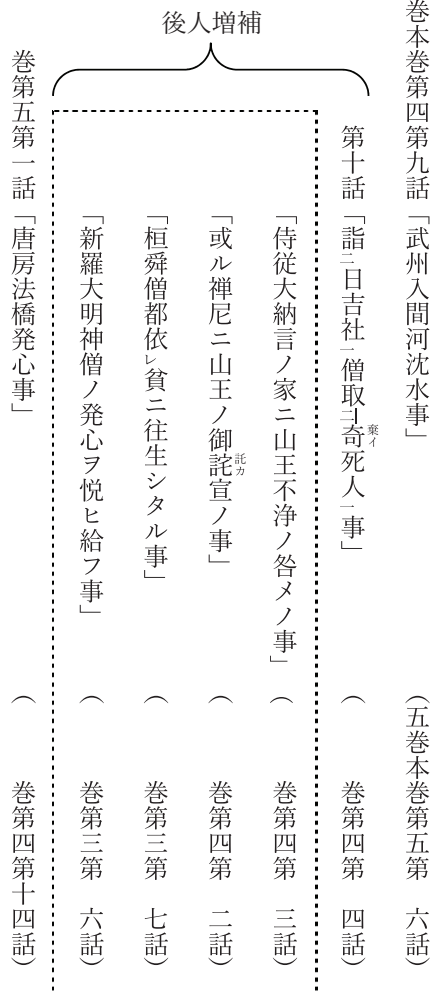
以上の研究状況を前提として、次項以降では巻第四末に着目し、後二巻に後人増補の箇所が散在しており全体が後人増補であることを論証する。

第二項 巻第四末

現存の八巻本において、巻第四は十話から成る。しかし、同巻は決して当初から十話で一定していたのではないと考えられている。

そもそも五巻本は六十二話から成り、その五十八話は前述の如く現存八巻本の前六巻と配列は大きく異なるものの重複し、残り四話は前六巻にない独自説話である。夙に築瀬一雄は、『私聚百因縁集』巻第九にある十四話が『発心集』前六巻からほぼその順序で採録したものであり、しかもその二話が五巻本の独自説話であることを指摘し、『私聚百因縁集』の編者の見た『発心集』は、(…)大体に於て流布本(八巻本…引用者註)『発心集』の第一巻から第六巻に至る説話と更に神宮文庫本(五巻本…同前)のみに伝へられる四条とを併せ持ち、しかも説話の順序はほぼ流布本の如きものであつたらう」と推定した。⁽¹⁾『私聚百因縁集』は成立時期が未詳であるが、同じような対応関係は弘安六年(1283)成立の無住道暁『沙石集』にも見られる。⁽²⁾すなわち、晚くとも『沙石集』成立以前のある時期、現存する八巻本の前六巻に相当して四つの独自説話も含んだ『発心集』が存在し、そこから抄出されたものが

巻第四末 復元図



※罫内の四つは脱落したらしい独自説話。その配列は山口真琴の推定による。

五巻本や『沙石集』などだということである。

山口真琴は、その内容や『私聚百因縁集』での順序から、四つの独自説話が位置していた箇所は前六巻の巻第四末だったとし、本来の順序を図の如く復元した⁽¹³⁾。

蓮胤没後のある時期に前六巻相当の『発心集』が右の如き配列で存在していたとして、問題はこれらすべてを蓮胤本人の作と見てよいかということである。浅見和彦は、八巻本の巻第四第十話「詣^ニ日吉社^ニ僧取^ニ奇死人^ニ事」という神明説話は前後の説話との脈絡が理解し難く、前の第九話「武州入間河沈水事」で終わりその次が巻第五第一話「唐房法橋発心事」となつてはじめて不審が解消するとした⁽¹⁴⁾。すなわち、巻第四は第九話「武州入間河沈水事」までが蓮胤真作であり、後人が五話を増補してその前一話が残存し後四話が脱落したとの説である。以下、これら後人増補の五話を「巻第四末」と称する。

巻第四末は前後説話との脈絡だけでなく、説話内容からも蓮胤真作と見得ない。山口が指摘したように、八巻本の巻第四第十話「詣^ニ日吉社^ニ僧取^ニ奇死人^ニ事」とその次話であつたろう五巻本の巻第四第三話「侍従大納言ノ家ニ山王不浄ノ咎メノ事」は、日吉十禅師が不浄を許すか咎めるかしたものであり、「両話の間には物忌みをめぐる神明譚という共通性があり、また〔…〕対照性も認められる⁽¹⁵⁾」。しかも両話に共通するもう一つの特徴は、『発心集』の主題である道心の有無や往生の成否を問題にしていなかつたことである。前者には「世ニアリ侘テ、京ヨリ日吉ノ社ヘ百日マイル^参」(二二ウ)僧が登場するものの、往生を願つていたとは述べられておらず、また話末評語でも「其後、コトニフレテ利生トオボユル事オホカリナントゾ」(二四オ)とされるのみで、現世利益が強調されているように見える。後者では、不浄を憚らなかつた南都の堪秀已講と病床の藤原成通が咎められるのみで、やはり病氣平癒の成否という現世利益が問題にされている。

巻第四末の五説話は雑然としており、日吉山王と新羅明神という天台宗守護神の讃仰以外に共通の思想を見出し難い。恐らく巻第四末は、山僧が蓮胤『発心集』の趣旨や第九話までの展開との整合を考慮せずに増補したもので

あろう⁽¹⁶⁾。新聞も、「もしこれが長明の手になるものであるとすれば、賀茂社の話ならまだしも日吉社の話をまとめてここに入れなければならない理由はないように思う⁽¹⁷⁾」として、巻第四末を後人増補と見ている。

このように、八巻本の巻第四末すなわち第十話と独自四説話は蓮胤没後に後人が増補したものであり、思想も蓮胤のそれと合致しない。

第三項 質直

この巻第四末で筆者が着目したいのは、質直の心への理解である。

後人増補の疑いがない偶数巻末以外の前六巻七十二話で、「質直」の用例は巻第三第八話「蓮花城入水事」に一つだけ見える。蓮花城という聖は往生のため入水することにしたが、直前になり怯んでしまう。かと言って衆目の前で止めることも出来ず、そのまま入水して「云甲斐ナキ死ニ」(二六オ)を遂げ、物の怪となった。これについて蓮胤は斯く評する。

人ノ心ハカリガタキ物ナレバ、必シモ清浄質直ノ心ヨリモヲコラズ、或ハ勝他名聞ニモ住シ、或ハ憍慢嫉妬ヲモト^本シテ、ヲロカニ「身燈入海スルハ浄土ニ生ル、ゾ」ト計シリテ、心ノハヤルマ、ニ加様ノ行ヲ思立事シ侍リナン。即外道ノ苦行ニヲナジ、大ナル邪見ト云ベシ。

(二六ウ・七オ)

人は必ずしも清浄質直の心によらず、勝他名聞や憍慢嫉妬の心によつて、身燈入海すれば浄土に生れると考えてこのような行を企てる。これでは外道の苦行と同じで、大いなる邪見だ、という。

そもそも清浄質直は、後述の如く『法華経』などに由来し、先行用例として鎮源『大日本国法華経験記』巻中第七十八条「覚念法師」(長久年間「1040」44)成立)の「其心清浄、質直、柔和」などがある。また三好為康「拾遺往生伝」巻上序(嘉承二年「1107」天仁二年「09」成立)では、「便知、質直之心、往生之門也。経云、「柔和質直者、即皆見我身^マ」、恐此之謂歟⁽¹⁸⁾」として質直が殊に重んじられている。しかし『発心集』では、偶数巻末以外の前六巻七十二話で用例が一つしかなく、右の巻第三第八話でも悪心でなく善心だとされているだけで、複数ある善心で最も善いものだとして置ける

でない。恐らく蓮胤は、勝他名聞や憍慢嫉妬を弾指するため『法華經』や先行往生伝にある「清淨質直」に言及したのみで、これを殊には重んじていなかったであろう。

他方、後人が卷第四末に増補したと推定される五卷本卷第四第二話「或ル禪尼ニ山王ノ御託宣ノ事」には、これと大きく異なる発心論がある。同話で光明寺の老尼に憑依した日吉山王は、奈良の不信の僧から往生の業を問われ、次の如く託宣する。

「詮スル所ハ、行ハ何レニテモ有リナン。〔…〕但シ、其ノ中ニ何レノ行ニモ亘リテ、必ス具スヘキ事ニツ有リ。〔…〕ニツノ事ト云フハ、慈悲ト質直ト也。是ヲ具セザレバ、縦ヒ何レノ行ヲ勤レドモ、往生ヲ遂ン事極メ・難シ。〔…〕若シニヲ具スル事猶ヲカタクハ、セメテハ慈悲ハ、愚カ也トモ、質直ナラント思ヘ。心ウルワシ、カラズシテ淨土ニ生レン事ハ、如何ニモ有ルマジキ」トゾ宣ヒケル。

(四ウ〜五オ)

何れの行によつても往生できるが、必ず慈悲と質直を具えなければならず、これらがなければ往生は極めて難しくなる。ただし兼備することが難しければ、慈悲が疎かでも質直であろうと思え。心が直しくなければ淨土往生は有り得ないだろう、という。そして同話の話末評語では斯くも述べられる。

此ノ事、仏ノ御教ヘニ叶テ、目出度侍ヘリ。然レハ則チ『維摩經』ニハ「直心是淨土」ト説キ給フ。円融ノ妙經ニハ「質直意柔軟」トモ、又ハ「柔和質直者」トモ宣ヘ玉ヘリ。心ウルワシ、カラ、ン者ノ仏ヲ見ヘキ由ヲ、壽量品ノ偈ノ僅カニ一枚計リナルニ二ヶ所マテ教エ給ヘリ。自我偈トテ、諸神ノメデ給フモ思ヒ合セラレテ、貴ク侍ヘリ。

(五オ〜ウ)

この託宣は仏の教えにも合致しており、『法華經』壽量品第十六には「質直意柔軟」「柔和質直者」とあつて、心の直しい者が仏を見ると二箇所で説かれていて、という。このように本来は卷第四末にあつたろう五卷本卷第四第二話では、質直すなわち直しい心が往生を遂げるために最も重要だとされている。

卷第四末が後人増補であることは、この質直への評価によつても裏付けられる。仮に前六卷全体が蓮胤真作だとすると、当初質直を殊には重んじてい

なかったが、卷第四末で突如これを極めて重んじ、卷第五、第六では再び質直に言及しなくなった、ということになり理解不能である。

第四項 直しい心

前項で見た如く卷第四末では「質直」が「心ウルワシ」とも換言されていたが、このような表現は卷第四末以外の前六卷に全く見えない。「ウルハシ」の語は、蓮胤の前六巻で「行ヒノ具ウルハシクヲキ」(卷第一第十一話「高野辺上人偽儲妻女事」、二六オ)や「衣袈裟ウルハシク着テ」(卷第四第一話「三味座主弟子得『法華經』驗事」、二ウ)の如く、すべて仏具や装束を端麗に物することの形容のみに用いられ、重要な意味もなかった。

蓮胤による偶数巻末以外の前六巻と後人による卷第四末の二者を比較すると、前者で「質直」の用例は、勝他名聞や憍慢嫉妬と対照させたものが一つあるだけでさほど重んじられておらず、また直しい心と換言することもなかった。他方、後者では質直を直しい心と換言しつつ極めて重んじており、これがなければ往生できないだろうとする。両者の質直理解は大きく異なっていた。

そして注意すべきは、これら二つの発心論が後二巻で混在融合しているということである。後二巻の卷第七第三話「中將雅通持『法華經』「往生事」と卷第八第十一話「聖梵永朝離山住南都事」の評語には、それぞれ次の如くある。

只、何ノ行ナリトモ心ウルハシクシテ、其上ニ願ヲ発シ功ヲツムベキニコソ。

(五オ)

ウタテキ心ヲ持タル故ニ、智者トイフトモ其驗モナシ。〔…〕何ノ智慧モツトメモ、心ウルハシクテ其上ノ事也。

(二二ウ〜二三オ)

如何なる勤行も智慧も、すべて心の直しいことが前提だ、という。このように、後二巻で「ウルハシ」はすべて心の形容のみに用いられ、しかも心を直しくすることが殊に重んじられている。

後二巻で直しい心が何を意味するかは、卷第八第三話「仁和寺西尾上人依我執「焼身事」の話末評語によつて知られる。

上人ノ身命ヲ捨シモ、勝他名聞ヲ先トス。貧者ガ財宝ヲヌスメルモ、清クウルハシキ心アリ。(八オ)

「ウルハシキ心」は「清ク」との形容が加えられ、しかも「勝他名聞」と対照されている。これは明らかに、八巻本巻第三第八話「蓮花城入水事」の「必シモ清淨質直ノ心ヨリモヲコラズ、或ハ勝他名聞ニモ住シ、或ハ憍慢嫉妬ヲモト、シテ」(前掲)という文と、同本巻第四末「或ル禪尼ニ山王ノ御託宣ノ事」の「心ウルワシカラズシテ淨土ニ生レン事ハ、如何ニモ有ルマジキ」(心ウルワシカラズ者ノ仏ヲ見ベキ由)(同前)という文を融合させたものである。⁽²¹⁾なお、後二巻に「質直」の用例は全くない。

第五項 法滅の菩提心と無極の道心

同じような三者関係は、質直などだけでなく菩提心などについても見出し得る。

夙に野村八良が『発心集』の解題で「発心とは言ふ迄もなく発菩提心の義なり⁽²²⁾」と述べたように、従来蓮胤の所謂「発心」とは菩提心の発起だと考えられてきた。これは「菩提心」と「道心」が同一原語の異訳だということを前提にした理解であるが、川内教彰は摂関院政期の仏典や往生伝、仏教説話などを調査し、「経典や論疏では「菩提心」が、仏教説話集では「道心」が往生淨土の要件として説かれているという傾向が見出せるのである⁽²³⁾」と指摘している。そして偶数巻末以外の前六巻で「道心」は地の文に十一例、会話文に三例あるが、「菩提心」は巻第六第十三話「上東門院女房住深山事(厭穢土欣淨土事)」の会話文に一例しかない。そのため、蓮胤『発心集』で発起すべき心として頻出するのは道心である。

後人が巻第四末に増補したらしい五巻本の巻第三第六話「新羅大明神僧ノ発心ヲ悦ヒ給フ事」では、焼き討ちされた寺門の僧が痛歎していたところ、夢に新羅明神が現れて斯く宣したという。

「……今度ノ僧侶ノ中ニ、此ノ処ノナレル様ヲ見テ忽ニ法滅ノ菩提心ヲ起テ、無極ノ道心ヲ堅メタル僧一人有リ。必ス往生ヲ遂テ、早ク仏果ニ到リナントス。是レ大キナル悦ヒ也」ト宣ヘ給フ。(七二オウ)

会話文で「菩提心」が用いられているだけであれば不審とするに足らないが、この「法滅ノ菩提心」は蓮胤没前に用例の稀な天台教学の語である。⁽²⁴⁾

新羅明神説話の初出らしい「園城寺覚基僧都記」は完伝していないため、巻第四末の所謂「法滅ノ菩提心」が同記で如何に表現されていたかは明らかでない。しかし、蓮胤晩年成立の源顕兼『古事談』巻第五第卅七話は「道心」としているため、「園城寺覚基僧都記」でも「道心」だったと考えられる。巻第四末の増補者は、依拠文献にあったろう「道心」を天台教理で裏付けたくて「法滅ノ菩提心」と改めたに違いない。

『発心集』前六巻から継受した『沙石集』巻第一第七話の新羅明神説話「神明道心ヲ貴ビ給フ事」は、「法滅ノ菩提心」が一般読者には難解だからであろう、平易に「真実ノ菩提心」としている。道暁も改めざるを得なかった「法滅ノ菩提心」という難解な教理用語を、蓮胤が用いたとは極めて考え難い。また、通常の道心とは異なる道心を暗示する「無極ノ道心」も、やはり蓮胤によるものと見難い語彙選択である。

これら巻第四末の「法滅ノ菩提心」「無極ノ道心」は、偶数巻末以外の前六巻に全く見えないものの、後二巻の地の文に一例ずつ見える。巻第八第七話「或武士母怨子頓死事(法勝寺執行頓死事、雖末代不可卑下事)」は、法勝寺の九重の塔が焼亡して同寺の執行が悲歎に堪えず絶命終したことを「是法滅ノ菩提心ノツヨク発ルナルベシ」(二五オ)と評し、巻第七第五話「太子御墓覚能上人好管絃事」は慶滋保胤について「カレハ無極ノ道心者ナレバ、臨終ニ他念マジハリケム事、ゲニトモ覚ヘズ」(二五オ)と評している。

このように後二巻では、整合することのない偶数巻末以外の前六巻と巻第四末の思想が広く見られる。恐らく成立し得る唯一の解釈は、後二巻が後人の模作だということであろう。すなわち、後人は山僧が加えた巻第四末の五つの天台宗守護神説話も蓮胤真作だと誤認し、六巻全体を模倣して二巻を偽作した、と考えざるを得ない。後二巻に混在する巻第四末の語彙や思想は、これが蓮胤真作に偽装された後人模作であることを物語っている。

前掲のものを含めて、『発心集』の前六巻と後二巻では文章表現の類似した箇所が表の如く複数ある。

前後対応表

前六巻	後二巻
<p>*賢キヲ見テハ、及難クトモコヒネガフ縁トシ、愚ナルヲ見テハ、自ラ改ムル媒トセムトナリ。 (巻第一「序」)</p>	<p>我心ノヲロカナル事ヲモ励シ、及ガタクトモコヒネガフベキナリ。 (巻第七第十二話)</p>
<p>人ノ心ハカリガタキ物ナレバ、必シモ清淨眞直ノ心ヨリモヲコラズ、或ハ勝他名聞ニモ住シ、或ハ橋慢嫉妬ヲモト、シテ、 (…) (巻第三第八話)</p> <p>*或人ノ云、「諸ノ行ヒハ皆我心ニアリ。ミヅカラ勤テ、自カ知ベシ。余所ニハハカラヒ難キ事也。〔…〕」。 (同前)</p>	<p>上人ノ身命ヲ捨シモ、勝他名聞ヲ先トス。貧者ガ財宝ヲヌスメルモ、清クウルハシキ心アリ。惣テ人ノ心ノ中、タヤスク余所ニハカリガタキ物ナリ。 (巻第八第三話)</p>
<p>新羅大明神、答エ給フ様、「〔…〕今度ノ僧侶ノ中ニ、此ノ処ノナレル様ヲ見テ忽ニ法滅ノ菩提心ヲ起テ、無極ノ道心ヲ堅メタル僧一人有リ。必ス往生ヲ遂テ、早く仏果ニ到リナントス。是レ大キナル悦ヒ也」ト宣ヘ給フ。 (巻第四末)</p>	<p>近キ比、法勝寺ノ九重ノ塔、イカツチノ火ノ為ニヤケ侍シ時、カノ寺ノ執行コレヲ見テ、悲ニタエズ、絶入テ、其日ノ中ニ命オハル事ハ、皆人アマネクシレリ。是法滅ノ菩提心ノツヨク発ルナルベシ。 (巻第八第七話)</p> <p>カレハ無極ノ道心者ナレバ、臨終ニ他念マジハリケム事、ゲニトモ覺ヘズ。 (巻第七第五話)</p>
<p>心ヲイタス事モ無テ、「世ノ末ナレバアリガタシ、拙キ身ナレバ叶ハジ」ナド思テ退心ヲオコスハ、只志ノ浅キヨリヲコル事也。 (巻第五第四話)</p>	<p>道心ナキ人ノ習ニテ、我心ノツタナキヲバ不レ知、万ノ科ヲ世ノ末ニオホセテムナシク退心ヲオコスハ、愚ナル事也。 (巻第八第六話)</p>
<p>*但、諸行ハ宿執ニヨリテ進ム。ミヅカラツトメテ、執シテ他ノ行ソシルベカラズ。一華一香、一文一句、皆西方ニ回向セバ、ヲナジク往生ノ業トナルベシ。 (巻第六末)</p>	<p>サレド、宿執ニ随ヒ回向ニヨル事ナレバ、凡下ノ是非スベキニハアラザルナリ。 (巻第七第四話)</p>

※*印を付した箇所はすでに新聞水緒によって指摘されているもの。ゴチック体の箇所は本稿で引用したもの。

これを新聞は、「巻六以前と巻七以降は質的に同一のものがある」という「推定を補強するもの」と見る。⁽²⁵⁾しかし、類似は必ずしも蓮胤本人が後二巻を増補した証拠とならず、これらもまた後人が後二巻を蓮胤真作と偽装するために施した模倣と考えるべきであろう。

結語

以上本論では、八巻本『発心集』巻第四末の思想などに着目し、後二巻が後人の模倣であることを論証した。

今日伝存の八巻本『発心集』の巻第四は第十話で終わっているが、五巻本や『沙石集』などとの比較により、蓮胤没後のある時期、末尾に五巻本の独自四説話があり凡そ十四話であったと推定される。そして巻第四末すなわち第十乃至第十四話の五話は、直しい心を極めて重んじ法滅の菩提心という天台教理の語を用いるなどしており、明らかに蓮胤の作でない。巻第四末は恐らく山僧が、蓮胤の発心論などを考慮せずに増補したものであろう。

巻第四末の思想は偶数巻末以外の前六巻のそれと大きく異なるが、後二巻では両者が混在融合している。これは蓮胤『発心集』巻第四の末尾に山僧が五説話を増補した後、それらすべてを蓮胤の作だと誤認した別の後人が前六巻を模倣し、後二巻を増補したためだと考えざるを得ない。そして後二巻の増補後、五話の後四話は巻第四末から脱落し増補前に抄出された五巻本などに保存された。

註

本稿で用いた史料の書誌は以下の通り。引用に当たっては適宜字体と句読点を改め、訓点や傍点、傍記、括弧、頁数を付し、改行を省き、割註を山括弧で示した。
『発心集』慶安四年版(八巻本)：嶋長明全集(貴重本刊行会)。同山鹿文庫本(五巻本)：神田邦彦『山鹿文庫本発心集——影印と翻刻付解題——』(新典社、2011)

- (6) 『大鏡』、『愚管抄』、『沙石集』：日本古典文学大系（岩波書店）。『源氏物語』、『古事談』、『新古今和歌集』：新日本古典文学大系（岩波書店）。『法華経并阿弥陀経釈』：阿部泰郎『中世宗教思想文献の研究（二）——宗性写・澄憲章』法華経并阿弥陀経釈「解題と翻刻」、『名古屋大学文学部研究論集』文学四四、1998。『色葉字類抄』黒川本：中田祝夫・峰岸明共編『色葉字類抄研究並びに総合索引——本文・索引編——』（風間書房、初刊1964）。『常光国師語録』、『菩薩地持経』、『摩訶止観』：大正新修大藏経（大正一切経刊行会）。
- (1) 永積安明『長明発心集考』（『初出1933』、『中世文学論』鎌倉時代篇「改版」、日本評論社、1946「初版1944」）など参照。
- (2) 築瀬一雄『発心集研究序説』（『初出1938』、『発心集研究』『築瀬一雄著作集』三）、加藤中道館、1975。参照。
- (3) 拙稿『発心集』後人裏書攬入説——巻第六末の思想などに着目して——、『WASEDA RILAS JOURNAL』四、2016。
- (4) 山部和喜は、現在の『発心集』研究で五巻本が殆んど顧みられていないとし、その理由を「本文が後代的特徴を持ち、説話配列も流布本に比して穏当ではない、乱れているとされたために、より原態に遡及するという方向で進められてきた『発心集』研究においては、さほど有効性を持ちえないと判断されたことによるであろう」と推測する（『神宮文庫本「発心集」の構成』第一章、初出1992）、『発心集新考』、おうふう、2012、五頁。八巻本の巻第四末もこれと同じ研究状況にあると考えられる。
- (5) 小林芳規「心経——発心集増補部の撰者についての国語史よりの提言——」、『汲古』九、1986、一一、一五頁。ただし小林は、角筆文献の分析から「近畿圏においても、規範外の言語場では、院政時代に既にmとnとの音韻の別が失われていることも考えてみなければならない」（一九頁）として断定を避けるが、蓮胤生前の京師で神の夢告として語られるほどに音韻の同化が進んでいたとは考え難い。
- (6) 松本修『全国アホ・バカ分布考——はるかなる言葉の旅路——』、新潮社、1996（初刊1993）、四一一、四一五頁。
- (7) 小島孝之「撰集抄」の神明説話（第三章第二章、初出1997）、『中世説話集の形成』、若草書房、1999、二九七頁。また狩野一三「発心集」跋文考（『古代中世文学論考刊行会編「古代中世文学論考」九、新典社、2003、二五二—二頁）参照。なお伊東玉美は、「百王ノ今」について「代々の王が続いて今日に至るまで、という、文飾としての「百王」と捉えて問題がないと思う」とする（『流布本「発心集」跋文考』、『国語と国文学』九〇・八、2013、三二頁）が、当時の確実な用例が他に見出されないため従い難い。
- (8) 新聞水緒『流布本「発心集」成立試論——神祇説話を手がかりとして——』、『説話と説話文学の会編「中世説話文学の世界」』（『説話論集』七）、清文堂出版、1997、二〇九頁。

八巻本『発心集』後二巻後人模作説

- (9) 例えば新聞水緒は、後二巻の後人増補は巻第八第十話「於金峰山犯妻者経年為盲事」以降だけだという説を唱えている（『流布本「発心集」成立試論』「前掲」、一九三頁）。
- (10) 築瀬一雄「私聚百因縁集出典考——発心集と関係ある説話について——」（『初出1941』、『発心集研究』「前掲」、一四七頁）。
- (11) 今日唯一の伝本である『私聚百因縁集』承応二年版には正嘉元年（1257）七月付の跋があり、通説ではこれを同書の成立時期とする。しかし湯合祐三は、同書の序跋本文や袋中良定「枕中書」所引の「百因縁集」上下逸文などを分析し、実際の成立時期は大きく降ることを論証している（『私聚百因縁集』と檀王法林寺蔵「枕中書」について、『名古屋大学国語国文学』八四、1999）、『私聚百因縁集』の成立時期——その法然門下についての記事と『内典塵露章』及び『天台名目類聚鈔』との関係から——、『愛知文教大学比較文化研究』六、2004。など参照。そのため、『私聚百因縁集』によって『発心集』巻第四末の増補時期を推定することは出来ない。
- (12) 『沙石集』の『発心集』継受については、上野陽子『沙石集』の『発心集』受容（『国語と国文学』八〇・一、2003）参照。なお上野は、梵舜本『沙石集』巻第七廿二話「貧窮ヲ追タル事」の出典は『発心集』巻第七七話「三井寺僧夢見貧報事」だろうから、道暁が読んだ『発心集』はすでに後二巻の加わったものだろうと推測する（三四頁）。しかし、両話に直接の書承関係があるとは見難く、『発心集』に後二巻が増補された時期は『沙石集』の成立以前だという説は未だ論証されていない。
- (13) 山口真琴「異本発心集神明説話をめぐる諸問題」、『国文学攷』九二、1981、一三頁。
なお、築瀬一雄は五巻本と『私聚百因縁集』での順序から、新羅明神説話と桓舜僧都説話が位置したのは巻第四でなく巻第五の末尾だとし（『私聚百因縁集出典考』「前掲」、一四八頁）、新聞水緒もこれを支持する（『流布本「発心集」成立試論』「前掲」、一六九頁）。しかし築瀬はそれ以前に、『発心集』前六巻の偶数巻末に後人増補があるのは同書が本来三巻または六巻三冊だったからだろう、という説も唱えており（『発心集研究序説』「前掲」、三五頁）、前後で矛盾している。また山口が指摘するように、禅尼説話と桓舜説話には「ともに往生の機縁とは何であるのか、往生を遂げるためには何が必要であるのか、という主題を取り扱っている点に両話の強い関連性を見ることが出来る」（二三頁）ため、二話は連続していたに違いないと考えられる。
仮に山口の推定した順序と位置が誤っていたとしても、天台宗守護神についての五話が後人増補でありさえすれば卑説に支障はない。そのため本稿では、五話が巻第四の末尾に連続していたものとして考察を進める。
- (14) 浅見和彦「発心集の原態と増補」、『中世文学』二二、1977、二七頁。原田行

造も、「日吉参詣の僧の不浄にまつわる話は、主題のつながりが稀薄で、後人の増補とも考えられる」と述べていた（『発心集の構想から眺めた成立過程試論——序・跋と八巻の形態をめぐって——』「第一編第一章第一節、初出1976」、『中世説話文学の研究』上、桜楓社、1982、五〇頁）。

(15) 山口真琴「異本発心集神明説話をめぐる諸問題」（前掲）、一二頁。

(16) 浅見和彦は『日吉山王利生記』巻第六との対応関係から、巻第四末の五話について「日吉大社関係の説話の管理者達」が「日吉山王関係の話を集めた、比較的少部の説話集（或いは説草）」から採録したのでないかと推測した（『発心集の原態と増補』「前掲」、二九～三〇頁）。しかし、巻第四末の「新羅大明神僧ノ発心ヲ悦ヒ給フ事」（五巻本巻第三第六話）は日吉山王でなく新羅明神についての説話であり、山王関係の説話集に含まれていたとは考えられない。

巻第四末の新羅明神説話では、山門が寺門を焼き討ちしたことについて夢告で「罪ヲ作クル事ノ悲シカラヌニハアラ子ド、濁レル末ノ世・習ヒナレバメヅラシカラス」（七二ウ）と擁護させており、これは初出らしい「園城寺覚基僧都記」（『園城寺伝記』巻第四「新羅明神守護出離生死人」事」条所引逸文）に見えない。すなわち巻第四末の新羅明神説話は、山門による焼き討ちは重罪でないどころか発心の因縁になった、とも解釈できるように改変されている。

また本論第五項で見る如く、同話の語彙には天台教理への浅からぬ学識が見える。そのため巻第四末の増補者は、山門の僧侶だったと見るべきであろう。

(17) 新聞水緒「流布本『発心集』成立試論」（前掲）、一七三頁。

(18) なお笠原一男は、『拾遺往生伝』と『発心集』巻第四末を根拠に、質直が「古代社会における往生のための条件」だったと力説した（『女人往生思想の系譜』、吉川弘文館、1975、一一頁）。しかし、質直を極めて重んじた当時の事例は他に見出し難いため、従い得ない。

(19) 直しいという漢字表記は、橘忠兼編『色葉字類抄』黒川本巻中辞字の「直ウルハシ」（五三才）による。またその心の形容としての用例には、『源氏物語』蛸第廿五帖にある光源氏の言「仏のいとうるはしき心にて説きをき給へる御法も、方便といふ事ありて」（四三九頁）や『大鏡』巻第二太政大臣実頼条の「凡何事にも有識に、御こゝろうるはしく、おはしますことは」（八五頁）、慈円「愚管抄」巻第五の「小松内府ハイミジク心ウルハシクテ」（二四六頁）などがある。

(20) 同話について、夙に橘純孝は「かなり教義臭が濃厚で僧家的口吻多く、引用経典にも『維摩経』『法華経』があり、〔…〕復大体に於て天台宗的ではある」（『長明発心集私見（下）』、『国語と国文学』一一・一二、1935、三四頁）と述べ、天台僧による増補だろうと疑っている。しかも、『発心集』において仏經の讚歎引用は複数あるが、「円融ノ妙經」のような経名的美称はここにしかない。

また、質直が慈悲よりも重要だという託宣の背後に、前田雅之は日吉から奈良への「優越意識」（『神明説話集』——『日吉山王利生記』の場合——）「第一部第六

章、初出1993」、「古典論考——日本という視座——」、新典社、2014、一二〇頁）を、高橋悠介は「対抗意識」（『光明山での山王託宣譚と南部——神宮文庫本『発心集』第三十六話をめぐって——』、『文学』一一・一、2010、一二二頁）をそれぞれ読み取っている。これらのことから、巻第四末は山僧によって増補されたと考えるべきである。

(21) 稀有な先行研究として、入部正純は巻第四末と後二巻に直しい心の思想があることを指摘している（『発心集』についての一考察——その信仰態度をめぐって——）『文芸論叢』三、1974、三五頁、「発心集の往生思想——その基盤的なもの——」『文芸論叢』二五、1985、二八頁）。ただし、入部がこれらを後人増補でなく蓮胤真作と見たことには従い得ない。

(22) 野村八良『鎌倉時代文学新論』増補、明治書院、1926（初版1922）、二九八頁。

(23) 笹田（川内）教彰「平安後期浄土教の一考察」、『仏教大学文学部論集』八八、2004、一二頁。また、同「厭離穢土」考——撰関期浄土教をめぐる諸問題——（伊藤唯真編『日本仏教の形成と展開』、法蔵館、2002）や同「平安浄土教の一考察——発菩提心をめぐって——」（高橋弘次先生古稀記念会事務局編『浄土学仏教学論叢』一、山喜房仏書林、2004）参照。

(24) 「法滅ノ菩提心」の出典は、『菩薩地持經』巻第一に所謂発菩提心四縁の第三「雖不聞法、見法滅相而作是念」（八九〇頁）や、それを参照したらしい智顗『摩訶止観』巻上の「或見種種法滅、〔…〕而發菩提心」。智顗が『菩薩地持經』を参照したらしいことは、釈悟燈「天台智顗の「六妙門」の思想的源流」（『天台学报』五五、2012）参照。

この語の稀有な用例として、牧野淳司が指摘した（『延慶本『平家物語』「山門滅亡事」の表現——唱導世界における「法滅」の言説との関わりから——』、福田晃・広田哲通編『唱導文学研究』四、三弥井書店、2004、一四四頁）ように、『法華経并阿弥陀経釈』第三条「本願上人歎徳事」に雲居寺瞻西が河内国大平寺の顛倒破壊を見て「法滅菩提心」を發したとある（四ウ）。同条は、天治元年（1124）の勝應弥陀院供養から「七十余年」後（五オ）に歎徳した安居院澄憲の説草の一部らしい（阿部泰郎「中世宗教思想文献の研究（二）」「前掲」参照）。法滅の菩提心はこれ以外に用例を見出し難く、浅見和彦と伊東玉美も空谷明応「常光国師語録」巻上（心永十二年「1405」正月廿八日付）の「前仏末法、必有「発菩提心」人」。謂之「法滅菩提心」（一〇頁）を挙げるのみである（『発心集』下、KADOKAWA、2014、一三七頁）。

(25) 新聞水緒「流布本『発心集』成立試論」（前掲）、一八八頁。

追記

本稿の論旨に直接は関係しないが、前稿「『発心集』後人裏書攪入説」で示した卑説

についてここで一部訂正したい。筆者は前稿で、『発心集』巻第六末の作者の最有力候補を如蓮房禪寂とし、その根拠として前六巻と禪寂草「月講式」の複数箇所類似を挙げた。しかし、生前の蓮胤が禪寂に講式に記してほしい内容を伝えたり、『発心集』を披見させたりしていたということも有り得るため、このような類似によって禪寂が巻第六末の作者だったとすることは出来ない。巻第六末の作者が専修念仏者だったとする卑説を訂正する必要はなく、またその候補者から禪寂を除外する必要もないであろうが、あの類似を根拠として禪寂を最有力候補としたことは誤りであった。

The Imitated Last Two Volumes of the Eight-Volume Version of *Hosshinshū*: Focusing on the Thoughts at the End of Volume 4

Shin'nosuke MORI

Hosshinshū is a collection of Buddhist tales written by Ren'in (1155?-1216), who was also known as Kamo no Chōmei, in his last years. While the current version of the book comprises eight volumes, several researchers have argued that some parts of the book must have been added by others. In this article, focusing on the thoughts at the end of vol. 4, I will prove that vols 7 and 8 were imitated by another person.

Vol. 4 of the eight-volume version of *Hosshinshū* consists of ten episodes. Comparing this with the five-volume version, however, reveals that vol. 4 must have had fourteen episodes at a certain point after Ren'in died. In the last five of the fourteen episodes, the author of them considered the pure mind to be very important and referred to "the bodhicitta of the Dharma's extinction," which is a term of the Tendai school. Being irrelevant to the rest of the collection, these five episodes must have been added by a monk of Enryaku-ji temple but not Ren'in.

While the thoughts at the end of vol. 4 are different from those in the rest of *Hosshinshū*, these two thoughts are mixed in vols 7 and 8. It should be understood that someone mistakenly believed that the six volumes including the five episodes added to the end of vol. 4 by a monk of Enryaku-ji temple were genuinely written by Ren'in and imitated vols 7 and 8. After the two volumes were added, the five episodes fell away from the end of vol. 4 and remained in the five-volume version.